

イタリア

美術の旅

小野 功夫

このたび東京芸大が実施した西洋美術研修旅行に私も参加した。ロンドンのブリティッシュミュージアムを振り出しに、各国の美術館、寺院、遺跡などを見学して廻った。紙数の関係で他は割愛して主にイタリアについてのみ記すことにする。

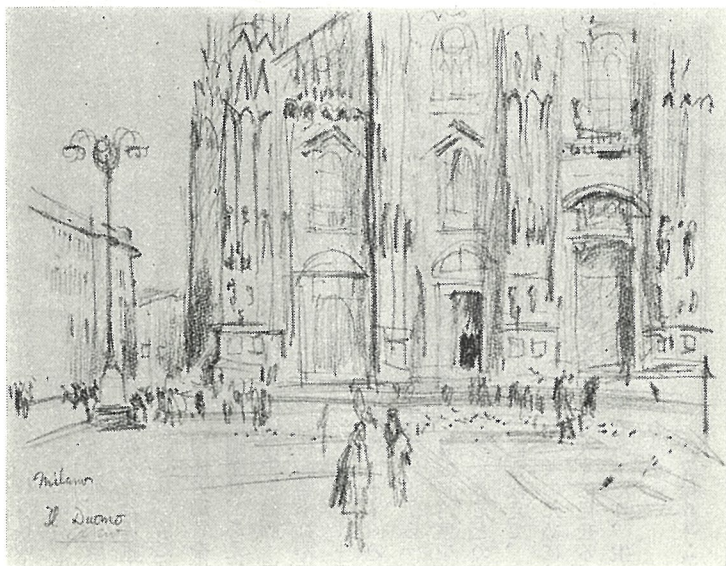
三月のロンドンはまだ肌寒むかった。ミュンヘンでは黒い石畳に雪が積り、夜は鉄戸を閉めた石の家からは一条の光も漏れぬ、巨大な墓場のような淋しさであった。しかし旅が南に進むにつれ、空の色も明るくなり、それまで枝だけだった同じ樹に、スペインでは花が咲いてきた。

イタリアに入った日はちょうど復活祭の日

であった。朝もやにかすむベニスに浮かんだデラサルト寺のクウボラをあとにして、ローマへの道をベローナに向った。

ベローナは古代ローマ帝国の時代に栄えた街で、丘を登ると古代の円形劇場跡が緑の平野を背景に広がるがっていた。ハイネはオレンヂ売りの乙女の小麦色の肌の色を見て、イタリアを感じたと、何かに書いていたが、たしかにイタリア人の肌の色はわれわれにも親しさを感じさす。路ばたで背の低い太

ったおばさんが真紅な実のオレンヂを車に一杯積んで売っていた。白いあんずの花咲く麦畑の中をバスで走る、誰かがラジオをかけて



ミラノ本寺



ペローナ古代円形劇場前広場

くれと運転手に言ったが、いまは復活祭なのと断わられた。
パドヴァの街に入った。ダンテの神曲の中ではカッペリアラ・スクロペーリの名で呼ばれているサンタ・マリア・アラ・アレーナ寺の壁面一ぱいに描かれたジオットの壁画を見た。祭壇にはジョヴァン・ピサーノの聖母像がある、暖かい表情と動きのあるポーズに

ルネッサンスの気運が感じられる。イタリアで一番古い大学で、ガリレオもここで教鞭をとったと言われているパドヴァ大学を見学してサン・アントニオ本寺に行った。緑色の巨大なクウボラの前にドナテルロのガッタメラタ騎馬像がある、落着いた姿の内に素晴らしい緊張感を密めている。ベニスサン・ジョバンニの広場にあるヴェロッキオのコレオーニ騎馬像とともにルネッサンスの二大騎馬像として有名だが、コレオーニのいまにも突撃し出しそうな緊迫感とは違った充実感で迫ってくる。

*

イタリアの空に星が輝く頃ラベンナに着いた。かつては西ローマ帝国の主都であったこの街も、いまは淋しい。

ラベンナは一旦滅亡したがフレデリック大王が再建を行った。そのためビザンチン様式が移入されて、ロマネスクの様式にビザンツモザイクを加えた、素晴らしい教会堂を造った。サンタポリナレ・イン・クラッセ寺の祭壇のモザイク、またサンタポリナレ・イン・ヌオボ寺の上段の壁には、橄欖樹が茂る緑の園を、白と金の衣を着た聖者の行進が描

かれている。堂内のモザイクの一つ一つを、南欧の明るい陽が鮮かに浮き上らせていた。

サンビターレの裏庭にひっそりと女帝ガラプラチディアの墓がある。案内人は入口の扉を閉めて、照明で内部を照らしてくれた、色石でたんねんに描かれたモザイクは退色も、剝落もなく、まさに永遠の絵画である。上方の小さな窓はメノオで造られ、ここを通して薄紅い光が墓内を照らす、あたかも宝石箱の中の世界といった感じであった。

古い石を積み重ねてできたこの街の、石畳の片すみにダンテの墓が真白く南欧の陽を浴びていた。

*

青年ミケランジェロは自由都市フィレンティエのために正義の巨人ダビデの像を彫りあげて市民の歡喜を受けた。高さ六メートルのこの巨像はいまフィレンティエのアカデミア美術館にある。未完に終わった奴隷の像、晩年の作パレストリーナのピエタ、またミラーノのアンティカの城で見たロンダニーニのピエタ、これらはいずれも恐ろしいまでの生命感で迫ってきた。

十五世紀のフィレンティエはメジチ家と、

ピッツィ家の両豪族によって統治されていてメジチ家は街の真中に、ピッツィ家は街を見おろす丘の中腹に、それぞれ広大な屋敷をもっている、いまも残っている。この丘に続いてミケランジェロが設計した砦がある。ここからのフィレンティエの街の眺めは素晴らしい、アルノ河が街の中を貫いて、ポンテ・ヴェキオ（古い橋）が昔日を物語っている。

ブルネレスキが設計した本寺のクウポラ（ミケランジェロはこの本寺を「バツタの籠」と評した）と、それに並んだジョットの塔が実に美しい。ルネッサンス当時は百本近くもの塔が競い建っていたとか、いまは数少なくなっている。

ミケランジェロがメヂチ家のために彫刻した墓碑「夜と昼、朝と夕」がメヂチ家の礼拝堂に眠っている。勇壮で高潔なメヂチ家と、熱した鉄のような精神と深い苦悩を持った不世出の天才ミケランジェロとの出会いが創りあげた結晶である。

マサッチオ・ジョットから始まったイタリルネッサンスの美術は、チマブエ、フラ・アンジェリコ、ボッチチェリ、ドナテルロ・レオナルド、ミケランジェロ、ラファエロ



フィレンティエの市街

と多彩な天才を生み出した。ウフィツィ美術館、アカデミア美術館、ナシオナル美術館、その他多くの寺院や礼拝堂にこれらの偉大な作品を見ることが出来る。フィレンティエはイタリアルネッサンスの全てを持っている素晴らしい街であり、街そのものが芸術だと言いたい。

*

フィレンティエの南、アレツツォには旧約聖書にあるシバの女王の話でよく知られている聖十字架を描いたピエロ・デラ・フランチェスカの壁画がある。またコルトーナでフラアンジェリコの受胎告知を見て、ベルギーノの生れたペルージアを通じてモンテスパシオ



の丘を下ると、平野の中にアシジの街と塔が突然あらわれる。

アシジは庶民的な聖人フランチェスコの話で有名だが、この地はまたイタリア絵画の発祥の地でもある。山の上の本寺はゴシック様式で非常に壮大なものだ、ジョットの描いた

壁画が寺内をとりまいている。その中にチマブエの筆も見られた。

*

フィレンティエの追望

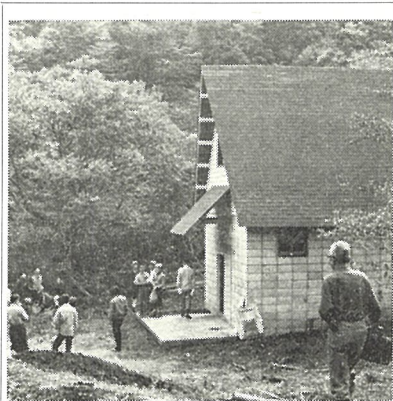
イタリアの旅はその後、ローマ、ボンペイと続いたのだが、ローマはあまりにも大きくテレビの泉やコロセウムは終日観光客で賑わっていた。カンベトリオの丘から見下ろしたフォロ・ロマーノは、かつての大ローマ帝国の偉容を眼のあたりに展開していた。夜のローマも華やかにくりひろげられていた。イタリアはたしかに素晴らしい伝統を沢山持つている。もし芸術について考えたいならば、ここにはその資料は無限にあるだろう、しかし私はこの旅行には何の下心も持つては行かなかった、強いて持つて行かなかったのだ。それはこれ等の膨大な美の群が、私だけのために用意されたものではないことをよく知っていたからなのだ。しかし実際に偉大な天才たちの作品や巨大な文化に触れ、それらを生み出した風土に接して、やはり誰もが感ずるのと同じものを私もまた感じたとしても私にとっては、やはり新しい発見だったのである。(中学校教諭・美術)

八丁平に山小屋完成

大学ワンダーフォーゲル部(二部学生会所属、部員八十名)の山小屋が京都・北山の秘境八丁平に完成、10月8日に竣工式が行われた。創部十周年を記念して建てられたもので木造二階建、六十人収容できる。作業は道づくりからコンクリートブロックの運搬、セメント打ち、材木の組立てまで

すべて部員の手で行われた。竣工式は部員OB、来賓約八十名が出席して行われたが、星名大学長から「新心荘」という名前が贈られた。

(写真は完成した山小屋)



フルブライト留学記

源 河 朝 順

私は去年の九月から二月までの六ヵ月間、フルブライト英語教員として短かい滞米生活を経験しました。私たち語学教師が、実際に英語が話されている国で、その国の人たちと生活環境を共にすることによって、思想なり感情のあや、風物等を多少なりとも理解し、身をもって感じとることができたのは一つの収穫でした。このプログラムはいわば英語教師が「信じられないくらい」広大なアメリカを駆け足で、ニオイをかぐためのオリエンテーションであったともいえるでしょう。なにしろ見る物、聞くもの一つとして Things American ならぬはなしでした。試験に受

かるまではなかなか面倒ですが、後は万事快適でした。以下はその簡単な紹介です。

Washington Orientation

九月一日午後九時羽田を飛び立ったノースウエスト機は、呆気なくシャトルに到着、アメリカ第一歩の私にとっては歴史的瞬間の感激に酔う暇もありません。同じ夜半、国内線にあわただしく乗り換え、ワシントンのダレス空港に降りたのが二日の正午。本当は三日ですが、日付変更線のため、一日得をしたわけです。

ジェット旅行は味もそつけもなく、旅情な

ど薬にたくともありません。お蔭で私の胃袋は完全に調子が狂い、夜と昼が逆になり、昼は居眠り、夜は目が冴え真夜中になると空腹に悩まされました。ですから折角の教育局主催の盛り沢山なオリエンテーションプログラムもさっぱりで、私の印象に残るものといえは最終日に催された International Exhibits くらいのものでした。

各国から持ち寄ったお国自慢の民芸品やボスターなど展示して、民族衣裳に身をこらしめた各国の先生たちが、自国を紹介宣伝する半ばお祭り騒ぎの余興なのです。私はたまたま日本大使館から貸りてきた新幹線の色彩豊かなボスターを貼り出したところ、これが意外と内外の関心を集め、その説明に大童でした。東京―京都間三百マイルを三時間、世界で最も速い電車と具体的に数字をあげ聴衆を煙に巻きました。

しかし訪日したことのあるという一老婦人から、着物姿の日本女性の活花のデモンストラーションがないのはどうしてかと聞かれ、予想していなかっただけに、残念に思いました。

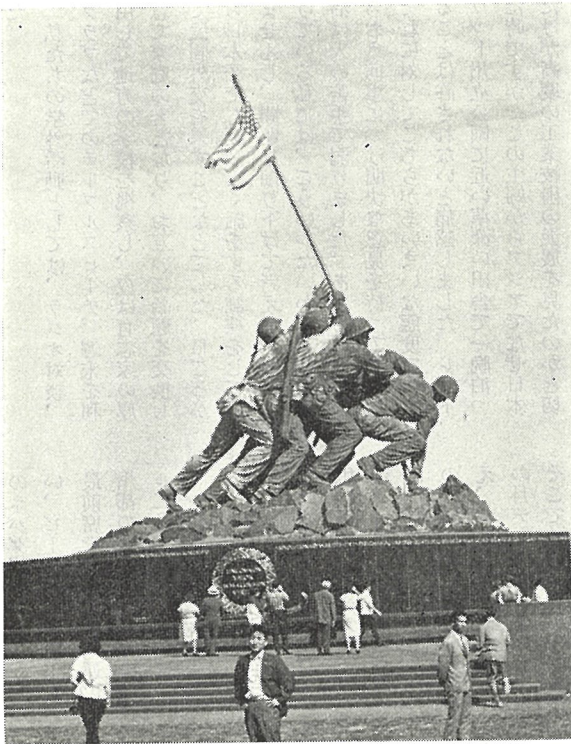
University Assignment

日本から一緒にやってきた二十一名の英語教員は、四つの大学グループに別れ、それぞれ飛行機で、あるいは汽車でワシントンでの二週間以上にとわたるオリエンテーションに終止符を打って、散って行きます。私たちサンフランシスコグループは、ケネディ暗殺で一躍名を馳せたテキサスのダラスを経て、七時間後にはもう目的地に着きました。ヨーロッパ、中近東、中南米、アジアなど二十カ国から集まった総勢三十二名。半数が女性でミセスがたった一人という妙な組み合わせでした。

サンフランシスコ州立大学では私たち教員のため特別クラスが用意され、構造言語学、教育法を中心に講義が組まれており、また一般の学生のクラスも聴講できるようにしていました。私たち日本英語教育界になじみ深いウォマック博士の構造言語学は在日二カ年のフルブライト交換教授の経験など織り混ぜた興味深い意欲的な講義でしたが、伝統文法の洗礼を受けた大半の受講者には最後までどうもなじめず、頭をかかえていたようです。教育法のグリックスバーグ博士はミシガン大

学からやはり交換教授として訪日され、その後そのままこちらへ来られたという新進気鋭の助教授で、学期中、宿題、レポートでしほり上げ、南米やトルコの先生から悲鳴が上ったほです。のんびり遅刻でもしようものなら、厳しく忠告され容赦しません。安易な気持で留学を考え、なかば観光気分の不心得者

に我慢ならない様子でした。同教授は、しかし私たち日本人グループを二度も、金門橋を一望に見下すデラックスなアパートに招待してくれ、一緒に日本人町で買い集めた材料でスキヤキに舌鼓を打ち、同教授が日本で集めた流行歌を耳にしながら、ホームシックになったものです。



硫黄島海兵隊の銅像（ワシントン）

市民生活

アメリカの家庭生活を知るにはその一員として一緒に住む以外はないと考え色々不自由と気兼ねは覚悟の上で、黒人に職業を紹介する仕事に従事している公務員の一家に下宿することになりました。朝夕食事を共にし六畳位の家具付き部屋で百ドル。二十八才の主人は夜は弁護士試験にそなえて法律学校へ通う一見実直そうな青年、奥さんは五歳の男の子と三歳の女の子の世話で一日中バタバタしている小柄で神経質そうな二十五歳の女性。主人の給料でやりくりするのは大変ですと口癖のように言いつつも主人が弁護士になるまでの辛抱と張り切っていました。子供の躾は予想以上に厳しく、目上に対する言葉使いが悪いといつてはなんべんでも正しくいえるまで繰返させていました。しかし私が最初少々甘い顔を見せたものですから、私の部屋へ来ては大暴れに暴れ、手がつけれなくなり、とうとう思い切りお尻を引っぱいた事がありません。町へ出たついでにキャンディーを買ってやったら、それからというもの私を見ると二人共 Buy me candy とせがまれ弱りました。

た。

私たちの学外活動としては、ラジオ対談、クラブなどでのテーブルスピーチ。週末を利用して地方の学校を視察し、夜は有志家の厚意で家庭の客となり、お互いに話題を交換して民間外交を果すことなどでした。日ごろから日本語でも要領よく話をする訓練をしていませんし、問題を掘り下げて考える習慣に欠けている私には、こういったいわゆる社交生活は大の苦手で弱りました。あちらの人はいちおう何事につけ明快な意見を持っており、それに対してこちらがあいまいな態度で接することは許されないと痛感しました。レッドウッド州立公園に近い草深い田舎で一晚泊った時ですがその主婦からアジアでなぜ日本だけが高度の工業技術の発展を見たのかと切り込まれ、たじたじとなった苦い経験があります。

十二月のクリスマス休暇には、私たち教員グループは Greyhound のバスを貸切り二週間の旅行に出かけました。ロスからサンディゴ、メキシコ国境から北上してラスベガス、グランドキャニオン、リノ、途中大雪にあって立往生するオマケが付きましたが賭博公認

のネバダ州でちょっぴり賭博の気分を味わい、ビール一杯でアームストロングショウを最前席で満喫する幸運にありついたりして、州都のサクラメントを最後に、全長十六マイルに及ぶというバイブリッジを走り、四千マイルの旅程を無事終えました。

Community Assignment

大学の予定のコースを無事終了すると、思い出多いこのユニークな町シスコに別れ告げ、一月二十日午前九時全員大陸横断の汽車に乗りました。このゆったりとした乗り心地の良い汽車はのろのろとロッキー山脈を越え、荒涼とした砂漠地帯をよぎってコロラドの月デンバーに着いたのは翌日の夜でした。そこで一泊、翌日の午後は、すっかり雪化粧したこの高原の都市をあとに、ブルマンカーに乗り継ぎ、前日とはうって変わった荒涼たる大雪原をただひたすらに突走り、翌日昼過ぎようやくシカゴに到着しました。ジェット機の呆気ない距離感もこうして横断してみますと、この大陸の呆れるばかりの広さが実感となって感じられます。スタインベッグの言葉を待つまでもなく、全く「信じられない」く

らしいの、広大さで、アメリカの一端を知る貴重な経験でした。

シカゴでさらに三つのグループに別れ、私たち十名はミシガン州の州都ランシングへ夜行列車で向います。賑やかだったグループもこうして人数が減ってきますと、窓外の寒々とした風景も手伝って一同黙りがち。がらんとした汽車が目的地へ着いたのは真夜中を過ぎ骨の髄まで凍る寒さに一同ふるえ上りまし



上 サンフランシスコの金門橋

下 ラスベガス夜景

た。語学教育のメッカであるミシガン大学で数日講習を受け、いよいよ今度は単身片田舎へ行きました。

デトロイトから汽車で三十分、ミシガン大学のあるアンナーバとの中間にプリマスという人口八千くらいの町があります。ここはこの自動車王国デトロイトおよびその周辺の工場地帯のベッドタウンをなしている清潔な感じの町で黒人はほとんど見かけません。聞け

ば、市長が黒人を入居させないと公約して選挙されたということです。ここが私の任地です。プリマス高校の数学の先生の家庭にお世話になり、週日はこの高校に「出勤」して授業の参観、教室で生徒たちの質問を受けたり質問したりして十日間を個人行動するわけです。地元の新聞二社が早速インタービューにやってきました、派手に写真入りで紹介してくれました。この頃になるとだいぶ度胸がついてきて、受け答えも板についてくるから偉いものです。

二月十三日、デトロイトで他のグループと落ち合うはずでしたが、うっかり汽車の時間に遅れ、単身バスで一泊してワシントンにたどり着きました。ここで三十ページのレポートを提出し、最後の Evaluation Session が二月下旬に済んで公式にこのプログラムは終了しました。

帰国は、急に予定を変更して、アメリカで自信をつけた旅行度胸の延長のつもりで、四十日間かかって欧州をまわってきましたが、アメリカ滞在に劣らぬ副産物でした。

(香里中高教諭・英語)